My Town
わが街

My Friend
わが友

Mari
マリ

Christine
クリスティーヌ

10

千歳烏山

今も守る好江さんの教え

私の事務所は今、丸の内のビルの一室にあります。日本の文化、下町のよさを教えてくれた漫才の内海好江さんの形見となったものを事務所に置いています。「マリ・クリスティーヌ」と名前を入れた小さな祝儀袋です。「マリ、あなたも有名人なんだから、何かしてもらったりして、うれしいことがあったら心づけをこれに入れて渡すの。相手は喜ぶでしょう。あなたの名前入りなんだから。そうやって人様からかわいがっていただくのよ」

すべて好江さんが準備して、びっくりするほどいっぱいの祝儀袋を届けてくれたのです。今も使い続けています。二十歳の誕生日に七色の厄よけの帯留め、新しい襦袢を贈ってくれたこともありました。「女の二十歳は大事だからね」と。今でも大切に取ってあります。

もう1人の母の思い出
＝世田谷区北烏山で

でも、物以上に大事なことを好江さんは私に教えてくれました。座布団の差し出し方、お弁当をいただくときに箸を少しお茶で湿らせれば、ご飯がくっつかずに上品に食べられることなど、書き出せばきりがありません。年配の方に「あなたはよくそんなことを知ってますね」と褒められることがあります。本当のところは、ただただ好江さんの教えに従っているだけなのです。

私の結婚は二十四歳の時。嫁ぎ先は祖母の生まれ故郷の葉山町に古くからある老舗の料理屋です。その大広間で披露宴をしましたが、好江さんも漫才の相方で師匠でもある桂子さんと出席してお祝いに「鶴亀」を踊ってくれました。憧れの白無垢、角隠しでみなさんに挨拶しました。好江さんの前に行って「私、日本人みたい？」と尋ねると、好江さんは泣き出してしまいました。九七年、好江さんは六十一歳で亡くなりました。あれからもう十年になろうとしています。私にとってもう一人の母である好江さんのお墓は、千歳烏山の幸竜寺にあります。

（異文化コミュニケーター　題字も）　＝おわり

【次回は、出版プロデューサー高須基仁さんが執筆します】